

断りとアイ・コンタクト

任 炫樹

キーワード 勧誘、依頼、断り、非言語コミュニケーション (NVC)、アイ・コンタクト

1. はじめに

コミュニケーションは、大きく言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション (Nonverbal Communication、以下NVC) に分けることができる。非言語コミュニケーション研究のリーダーの一人であるBirdwhistell (1970) はことばによって伝えられるメッセージは全体の35%にすぎないと述べている。普段、我々が無意識のうちに使っているNVCは幅広い範囲で役割を果たしていることがうかがえる。特に対面場面において、コミュニケーションが成り立つには視線、表情、身振りなどのNVCが不可欠である。また、NVCは丁寧さと深く関係があると思われる。同じ発話内容でも話し手の視線、表情、身振りなどが加わることによって、聞き手の受け取り方は相当違って来るのである。そういうわけで、たどたどしい発音や文法の間違いなどとは違って、適切でないNVCの使用は誤解を招くのである。

それにもかかわらず、NVCに関する日韓対照研究は、従来の対照研究が文法や談話分析など、言語現象そのものを研究の対象としてきたため、ほとんど注目を浴びることはなかった。したがって、NVCに関する日韓対照研究はあまり進んでいないのが現状である。

さて、日本語と韓国語の言語体系は非常に類似していると言われている。それでは、言葉を使う際の日本人と韓国人の非言語体系はどうであろうか。

任・李 (1995) は韓国人と日本人のあいづちの頻度、あいづちのイメージや先取りのイメージなどについて、聞き取り調査とアンケート調査を行った。調査の結果を簡単にまとめると次のようになる。

(1) あいづちの頻度は韓国人より日本人のほうが多い。

(2) 日本人の場合は、あいづちの数が多いほど相手に対してプラスイメージを与える傾向が強い。韓国人の場合はその反対である。

このことから、両国の言語体系は類似しているからとって、必ずしも非言語

体系も類似しているとは限らないということがうかがえる。

そこで本稿では、コミュニケーション・ギャップの問題が起りやすいと推定される断り場面を取り上げ、日本人と韓国人の相違が際立っているアイ・コンタクトに焦点を絞って考察を加える。また断り場面における頼む側と頼まれる側との間柄についてはソト者同士のみを扱うことにする。このように考察対象を特定したのは、断りに対する努力の仕方は相手によって違ってくるからである。家族同士のようなウチ関係とか、道端でばったり会うセールスマンのようなヨソ関係にある人からの誘いや依頼に対する拒絶はその方法に悩まない。断るのが難しいのは円満な人間関係を維持していきたいと思っているソト関係の人に声をかけられた場合である。だから一番気遣いをしなければならないソト者同士の間には他の関係では見られないストラテジーが存在していると思われる。こういうわけで上記のように場面を絞り、日本人と韓国人が勧誘・依頼¹を断る際にそれぞれどのような形のアイ・コンタクトをとるのかを探ることにする。

今回の考察では、動画像の資料としてテレビドラマを使うことにする²。分析の資料としたのは下記の通りである。作品の選定するにあたっては、できるかぎり似通ったストーリーやテーマのものを選ぶように心掛けた。

- (1)日本：『東京ラブ・ストーリー』1部～10部（約500分）、『ブランド』1部～5部（約250分）、『ラブ・ストーリー』1部と3部～7部（約300分）、『オヤジい』1部～10部（約500分）、『恋がしたい』2部～5部（約200分）
 (2)韓国：『질투 (嫉妬)』1部～16部（約900分）、『국희 (グッキ)』1部～20部（約1000分）、『줄리엣의 남자 (ジュリエットの男)』1部～16部（約900分）

本論に入る前に、記号の説明、発話の単位、アイ・コンタクトの型、分析の対象とする断り場面について説明しておかなければならない。

以下の論述において、上記のドラマからいくつかの会話を引用することになるが、そこで使用する記号は次の通りである。

- | | |
|------|--------------------------|
| 。 | 日本語の基本的な発話末を表す。 |
| . | 韓国語の発話末を表す。 |
| ? | 驚きを表す。 |
| + | 上昇イントネーションを表す。 |
| +... | 言い切っていないが、言い終わっている発話を表す。 |
| | 発話が重なっている部分を表す。 |
| # | ポーズを表す。 |

長い沈黙を表す。

視線ONは■で示し、視線OFFは下線で表す。

非言語情報は（ ）で囲んで記入しておく。

日本語の場合は呼吸段落に一文字あける。

韓国語の場合は表記法により、基本的に分かち書きをして置く。これは必ずしも呼吸段落を意味しない。その代りに日本語訳は上の日本語の場合の基準にしたがう。

次に、発話の単位について説明しておく。本稿では、話を始めてからそれを締めくくるまでの一つの文を一発話と見なす。また、何らかの理由で発話を途中で中断した文も、それを一発話として扱う。このことを実例に印して説明する。

A：リカ B：リカの友達

A-1：行こう+ 行こう+

B-2：（目をつぶし、顔を歪めながら）ごめん 私 明日の発表会の準備+...

A-3：そうか。

B-4：（Aの肩をたたきながら）また今度 付き合うからさ+...

A-5：じゃね。

B-6：またね。

＜東京ラブ・ストーリー＞

Aの誘いを断るB-2とB-4が断り場面に当る。つまり、B-2の「ごめん 私 明日の発表会の準備」とB-4の「また今度 付き合うからさ」が各々一つの発話になって、発話数は全部で二つになるということである。ただし、例えば「ごめん###私 明日の発表会の準備」と「ごめん」のように長いポーズをおいてからことばを続ける場合、また謝罪や言いよどみが単独で使われる場合には一つの発話として扱う。

続いて、アイ・コンタクトの型について述べておく。アイ・コンタクトは、視線ON（相手の目・顔を見ている状態）と視線OFF（相手の目・顔を見ていない状態）の組み合わせにより、次の8種類に分けられる。

(1)視線ON→ON

話が始まって終わるまでずっと相手の視線を凝視するタイプである。しかし、相手に声をかけられ、それに応答する前のポーズで現れる凝視は除く。

(2)視線OFF→OFF

話が始まって終わるまでずっと相手の視線をそらすタイプである。視線ONと同様、相手に声をかけられ、それに応答する前のポーズで現れる視線の逸脱は

除く。

(3)視線ON→OFF

話を始めるときは相手を見るが、話の途中相手から視線をそらし、そのまま話を終えるタイプである。

(4)視線OFF→ON

話を始めるときは相手を見ないが、話の途中相手を見はじめ、そのまま話を終えるタイプである。

(5)視線ON→OFF→ON

話を始めるときは相手を見るが、話の途中相手から目をそらす。そして、そらしていた目を再び相手に向け、そのまま話を終えるタイプである。

(6)視線OFF→ON→OFF

話を始めるときは相手を見ないが、話の途中相手を見る。それから相手から視線をそらし、そのまま話を終えるタイプである。

(7)視線の乱れ

視線の変化が一つの発話の中で3回以上起こるタイプである。

(8)横向き

何も言わずに顔自体を横に向けてしまうタイプである。

最後に、分析の対象とする断り場面について述べる。本稿では断りを発する側についてのみアイ・コンタクトの分析を行うが、断りが発せられていても、下記の場面は調査の対象としない。

(1)話者が他の行動をとりながら話したり、テレビを見ながら話したりする場面

(2)話し手と聞き手の距離が遠いと判断される場面³

(3)話者の視線の動きがテレビ画面に正確に映し出されていない場面

作り話であるドラマに基づいて現実のNVCを判断することは問題があるかもしれない。普段行なわれている視線行動とドラマに現れる視線行動が必ずしも一致しているとは限らないからである。しかし、登場人物をはじめ、監督、作家などはその国で生まれ育ち、教育を受けた者である。したがって、そのストーリーに現れる俳優の演技にはその国のNVCの特徴が映し出されると十分考えられる。当然のことからNVCには個人差は存在する。しかし、日本人と韓国人の間に個人差を越えた相違点が導けるとすればそれを指摘することは十分価値のあることであると思われる。

2. 勧誘と依頼を断るときのアイ・コンタクト

日本には「目も口ほどに物を言う」ということわざがある。韓国にもこれに類似した「눈은 마음의 창 (目は心の窓)」ということわざがある。これは、日本も韓国もアイ・コンタクトがコミュニケーションをはかる上で、非常に重要な役割を果たしているということを示唆している。目の使い方に影響を与える要因は色々あるだろうが、話題の負担度によってもそれは相当に違ってくると思われる。プアーガス (1987:89) は「もし話題が個人的なことでなくて、気楽に話し合えるようなものであれば、注視は増大する。反対に、私的で面倒な問題が話題になり、そのため対話の当事者が気まずさ、恥ずかしさ、悲しさ、ことばで表現することのむずかしさなどを感じている場合には、アイ・コンタクトは最小限になるだろう」と指摘している。しかし、これは英語母語話者について述べたものであるため、必ずしも日本人と韓国人にも適用できるとはいえない。相手の申し出を拒絶するのは気楽な話題ではないと思われる。両国人の断り場面で見られるアイ・コンタクトはどんな形で見られるだろうか。

2.1 勧誘を断るとき

勧誘は社交場面でよく現れる現象である。勧誘は申し出る側の利益より受け手の利益を前提とする場合が多い。しかし、勧誘の内容によって受け手は「小さな親切、大きなお世話」と思う場合もある。この場合、断る側の言い方は「結構です」「いいです」とストレートになりやすい⁴。せっかく誘った人にこのような言い方で接するのは場合によっては失礼に当たる。

しかし、いくらぶっきらぼうでストレートな言い方でも、その場、その文化でよしとされる適切なNVCで応じると相手に誠実さと丁寧さを与えることは可能である。このように断り方はNVCと深い関係にある。それにもかかわらず、今までの断りに関する研究は言語コミュニケーションのみを扱ってきたため、断る側がどれぐらい丁寧にはまたは不丁寧に応じているのかを判断することに無理があった。これはつまり、NVCも考慮に入れる必要があるということである。それでは、勧誘を断る際のアイ・コンタクトはどのような働きをしているかについて見ていくことにする。

日本の場合、勧誘に対する断りの総発話数は72回であり、視線ON→ONが13回、視線OFF→OFFが31回、ON→OFFが1回、OFF→ONが12回、ON→OFF→ONが2回、OFF→ON→OFFが9回、視線の乱れが4回であった。目立つのは視線OFF→OFFが視線ON→ONよりはるかに多いということである。意識的に

しろ無意識的にしろ日本人は断りを表明するとき、できるだけ相手の目を見ないまま、自分の意志を表現する傾向が見られる。下に例を示す。

<例1>

A、B、Cは友達

A-1: 私たち これから夕ご飯食べに行くけど 一緒に行かない+

B-2: え?

C-3: 急にね 迷惑かもしれないし ねー。

B-4: (困惑の表情) いやいや 私 ちょっと 今日約束があるんで+...

A-5: あ そうなんだ。ではしょうがないね。

B-6: (軽い会釈、ちらっと相手を見るふりをしながら) 失礼します。

<ラブ・ストーリー>

例1はただの儀礼的な食事の誘いの場面である。ここでBは、Aの食事の誘いに戸惑いを隠せない。「約束がある」という部分だけ相手を見て、視線はOFF→ON→OFFになっている。Bは困惑の表情を浮かべており、短い文であるにもかかわらず、視線の変化も頻繁に起こっている。このようなNVCの使用において相手に申し訳なく思う気持ちはうまく伝わるかもしれない。しかし、誘った側は「相手にかえって迷惑をかけたのではないか」と思い込む可能性もあり得るだろう。

ブラズナハン(1988:216)は日本人と英語話者の全般的なNVCを比較している。普通、持続した視線や凝視は他人に対する特別な感心、挑戦、無礼を示すのに対して、視線をそらすことは無関心、興味なし、恐怖なし、嫌悪、困惑、内気、尊敬を示すとしている。ところがこれは一般論であるとし、日本人の目の接触の欠如はむしろ丁寧さや尊敬を意味する場合が多いことから、それは必ずしも興味の欠如を意味しないと述べている。持続した視線ONには特別な感心のようなポジティブな面もあるにもかかわらず、日本人にとっては挑戦、無礼のようなネガティブな面が浮き彫りにされているのではないかと思われる。日本人にとって、視線ON→ONはネガティブな面が強調されるようだが、韓国人にとってアイ・コンタクトはどのような働きをしているのだろうか。

韓国の勧誘に対する断りの総発話数は73回であり、視線ON→ONが54回、視線OFF→OFFが7回、ON→OFFが1回、OFF→ONが7回、ON→OFF→ONが4回であった。OFF→ON→OFF、視線の乱れ、横向きは見られなかった。日本人は断りを表明するとき、相手の目を見ない傾向があったのとは反対に、韓国人は相手の目をみたまま断りを表明する傾向が強くみられた。下に例を示す。日本語訳は筆者によるものである。

<例 2>

A : ファクション B : ファクションの母の知り合い

A-1 : 저 이만 가 볼게요.

B-2 : 왜+그냥 가게+#기왕 온김에 라운지에 올라가서 차 한잔하고 가지+

A-3 : (이소시으며) 아니예요 밑에 친구가 기다리고 있어요.

A-1 : 私 そろそろ 行きます。

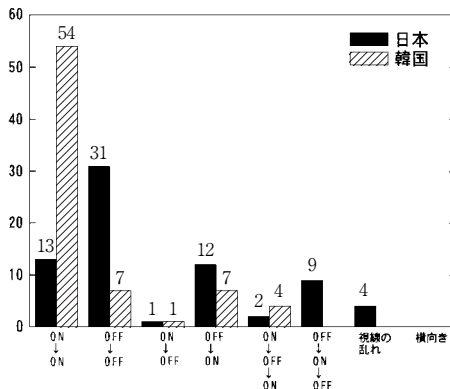
B-2 : え+もう帰るの+#ラウンジへ行って お茶でもどう+

A-3 : (微笑みながら) いいえ 下で友達が待っているんです。

<질투 (嫉妬)>

例 2 は日本の場合の例 1 と似ている軽い誘いの場面である。B の「차 한잔하고 가지+ (お茶でもどう+)」という誘いに対して、A は微笑を浮かべながら視線 ON のまま話している。一般的な韓国人の視線の動き方は、言いにくいことや自分が不利な場面では視線を合わすのを避ける傾向があると報告されている (金 (1989))。相手の意向に添えないことを言うというのは、言いにくいことを言うことであり、自分が不利な立場に立たされることである。しかし、今回の調査では、案外なことに、相手の意向に添えない場面で、相手の目を見るのが頻繁に見られた。日本に比べ、韓国の場合には、視線 ON→ON が多い。これは韓国人のアイ・コンタクトに対する意識と関係があると考えられる。要するに韓国では、アイ・コンタクトは失礼にあらず、信頼性を与えるのである。これを分かっている A は明るい雰囲気を作り、相手の面子を守ってあげようと努めているのである。もし、無表情のまま視線 ON が続けられたら A は堂々とした態度に映る⁵。断るときの堂々たる行動はマイナスイメージに違いない。また、視線を合わさないでうつむいたまま話をするとう嘘をついているように見えてしまい、相手の気持ちを害する恐れがある⁶。韓国人の言葉遣いを「十人十色」とたとえる場合がある。バラエティーに富んでいる言葉遣いが表情にも現れて、顔に出る表情も日本人よりもその種類が多い (任 (2001))。しかし、下の<図 1>から分かるように、勧誘を断るときのアイ・コンタクトに限っては日本人の方が韓国人よりその種類が多い。韓国人の場合には、視線 ON→ON に集中する傾向が強く、視線 OFF→ON→OFF、視線の乱れは見られなかった。韓国人においては、アイ・コンタクトはポジティブな役割をしていると言えよう。

この章の締めくくりとして、勧誘を断るときのアイ・コンタクトの型が日韓の間でいかに異なるかを下の<図 1>に示しておく (数値は発話数を表す)。



＜図1＞勧誘を断るときのアイ・コンタクト

2.2 依頼を断るとき

断るときには、相手の面子をつぶさないよう、不愉快な感情を抱かせないように工夫する。この工夫は勧誘より依頼を断る際にもっと際立つ。依頼というのはほとんど、申し出る側の能力の欠如や自分の都合のため頼む場合が多いことから「自分利益＝相手負担」の関係が成立する。したがって、断る側は冗談が減り、嘘や率直な心境を語るようになる。

日本のドラマにおける依頼を断る総発話数は10回であり、視線ON→ONが1回、視線OFF→OFFが5回、ON→OFFが1回、ON→OFF→ONが1回、OFF→ON→OFFが1回、横向きが1回であった。OFF→ON、視線の乱れは見られなかった。日本人が依頼を断るときのアイ・コンタクトは、勧誘を断るときより視線ON→ONの数が減る傾向が見られる。

＜例3＞

A：カンチ B：カンチの営業相手

A-1：ウチの広場もね そう広いわけじゃないから+...

B-2：はじめは少しずつでも結構です。置いていただければ 他社に決して負けない売上を出す自身があります。

A-3：誰もそう言うんだよね。(品物を片付けるふりをし、目を合わさない)
ということなんで+...

B-4：改めて伺わせて戴きます。

＜東京ラブ・ストーリー＞

例3のBの依頼に対して、Aは2回にわたって断りを表明している。A-1で断りが成功しなかったため、A-3で再び断りを表明している。2回目の断

りを表明するときAは品物を片付けるふりをして、相手の視線を避けるストラテジーを使っている。なおこのような場面設定は、韓国より日本の方が非常に多かったため総発話数は少なかった。また、韓国と同じ状況の断りと比較してみると、日本人はチラチラとしか相手を見ず、韓国人より頻繁に視線をそらす傾向がうかがえる。これを裏付ける説がある。佐藤（1977:157）は、日本人の視線の方向づけについて「視線を合わすということは、心の中を透視させるということであり、おそらくは人間の信頼関係のもっとも素朴で基本的な表現であるであろう。しかし、われわれは、視線をそらしたまま、あるいは時々視線を合わせ、あとは外らしたまま話をするほうがもっともしみじみした表情のある会話が出来る、という感じ方を持っている」と述べている。日本人が持っているアイ・コンタクトに対する基本的な考え方は、言い難いことを言わざるを得ない断りの場面ではさらに浮き彫りになるようである。

勧誘を断る際より依頼を断る際にもっと相手の目を気にする日本人に比べ、韓国人はどうだろうか。韓国のドラマにおける依頼を断る総発話数は62回であり、視線ON→ONが36回、視線OFF→OFFが5回、ON→OFFが4回、OFF→ONが12回、ON→OFF→ONが4回、OFF→ON→OFFが1回、視線の乱れと横向きは見られなかった。韓国人のアイ・コンタクトは勧誘を断る際と依頼を断る際の特徴として挙げられるのは、視線ON→ONが減る傾向と次の例のように文末で視線OFFがよく見られる点である。

<例4>

A：デパートの社長 B：デパートの職人

A-1：그럼 저희에게 친구여시까지 제공해주신 이유는 뭘니까+

B-2：송채린 사장이 제시한 자구대책안은# 훌륭했습니다.

A-3：그럼 왜 이제와서 위임장은+

B-4：솔직히 말씀드리죠. #우리가 보기엔 경험이 부족한 송사장 보다는# 탄탄한 신우그룹이 더 믿음이 갑니다.

A-1：それじゃ 私たちに授信を提供して下さった理由は何んですか+

B-2：ソンチェリン社長の提案した自球対策案は#素晴らしかったです。

A-3：それじゃ 何でいまさら委任状を+

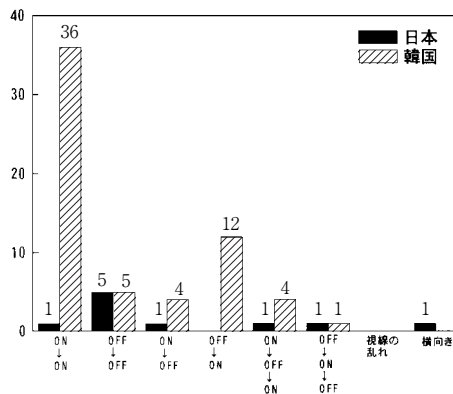
B-4：正直にお話しします#我々は経験の少ないソン社長よりは#シンウグループの方がもっと信頼できるんです。

<줄리엣의 남자 (ジュリエットの男)>

例4のように、依頼を断るときには視線OFFで終わる文がやや多くなる。韓国人は自分の利益と関係のある勧誘を断る際には文の最後まで相手を見る傾向がある。反対に、相手の利益と相手の面子と関係のある依頼を断る際には相手

をよく見られなくなるのである。これは韓国人の勧誘・依頼を断る際の相違点である。しかし韓国人と日本人の相違点は、日本人によくあるパターンである視線の乱れと横向きが韓国人にまったく見られないという点である。これは韓国人に視線ON→ONが多いということから当然考えられることである。なお韓国人に視線ONが多いのは視線を合わすということは、心の中を見せるという意味があり、もっとも嘘のない信頼性のある会話ができるという感じ方からであると思われる。こういうアイ・コンタクトに対する認識は日本人のそれと異なるので、場合によってはNVCによるミス・コミュニケーションを引き起こす原因にもなり得る。こういう問題について渡辺（1985）は、韓国で制作されたテレビドラマを分析し、日本語と韓国語のコミュニケーション・ギャップを引き起こす原因を、1）語学的用法の問題、2）コミュニケーション相互作用の諸問題、3）文化的価値観に関する問題という3つの視点から考察している。そして、日本人は思いやりのストラテジーを、韓国人は親愛のストラテジーを好んでいると結論づけている。これは日本人と韓国人の断りを表明する際にも適用できる。日本人にとって断ること自体は思いやり・気配りに反することになるため、自然に申し訳ない気持ちが働いて相手の顔を見られなくなるのではないかと思われる。一方、韓国人はその場で適切な言語表現を用いて人間関係を保ちながら、うまく乗り越えようとするストラテジーを使う。相手の意に添えない理由を述べながら相手をよく見るのは自分の本当の気持ちを分かってもらいたいと願う心理が働いているためではないかと考えられる。

この章の締めくくりとして、依頼を断るときのアイ・コンタクトの型が日韓の間でいかに異なるかを下の<図2>に示しておく（数値は発話数を表す）。



<図2>依頼を断るときのアイ・コンタクト

3. 韓国人の長いアイ・コンタクトの緩和処理

第2章でみたように、韓国人は相手をよく見ながら断りを表明する傾向が強い。しかし、相手をじっと見て断ったり、相手にじっと見られながら断られたりするのは容易なことではない。これを補完するため、韓国人にはそれなりに身につけているストラテジーが存在する。

<例5>

A：豊江の代表（グッキの知り合い） B：グッキ（太和堂の代表）

A-1：자# 계약서류다. 자# 읽어 봐라. 읽어보고 서명을 해야지. (생략)

B-2：죄송하지만# (떨구었던 시선을 들며) 이번 일은 없던 걸
로 해주세요.

A-3：아니, 무슨 소리아?

B-4：저희 태화당 풍강의 하청업체로 들어오기로 했던 거 철회하
겠습니다.

A-5：그건 안돼. 구두약속도 약속인거야. 어+ (생략)

B-6：죄송합니다# 아저씨 말씀이 옳아요.

A-1：じゃ# 契約書類だ。読んでからサインしてね。(省略)

B-2：すみませんが# (落としていた視線を上げながら) 今回の件はなかつ
たことにしてください。

A-3：なんだ。一体どういうことだ。

B-4：うちの太和堂が豊江の下請けになるという話はなかったことにしてく
ださい。

A-5：そうはいかん。口頭約束も約束は約束なんだから+... (省略)

B-6：すみません# (視線を上げながら) おじさんのおっしゃる通りです。

<국희 (グッキ)>

例5のBは、すでに口頭で約束しておいた契約を断らなければならないので、非常に困っている。断りは、この場合、軽い食事の勧誘のような簡単な問題ではない。したがって、このような断りをするときには、言語コミュニケーションはもちろん、NVCにも気を使わなければならない。言語コミュニケーションの面における韓国人の断り方の特徴は「理由型(弁明型)」を好むということである(任(1999)、金(1999))。申し出を受け入れられない自分の都合を詳しく述べることによって相手に信頼を与え、人間関係を保つのである。理由型を重んじることによって当然ながらその文は長くなる。このように長い文章をもっぱら視線ON→ONで述べるのは堂々とした印象を与えやすく、反対にうつ

むいてばかりいると卑怯な印象を与えかねない。だから、例5におけるB-2の「죄송하지만#이번 일은 없던 걸로 해주세요 (すみませんが#今回の事はなかったことにしてください)」とB-6の「죄송합니다#아저씨 말씀이 옳아요 (すみません#おじさんのおっしゃる通りです)」などのように文と文の間にポーズをとる。相手を見ながら「죄송합니다(すみません)」と発し、ポーズの間には視線を落とす。そして、話が始まったら再び相手を見る戦略である。上記のような長いアイ・コンタクトの暖和处理は相手の視線を避けられるのと同時に韓国人が望んでいる本音も伝えることができるのである。

4. 謝るときのアイ・コンタクト

断り表現で使われる謝りは相手との間で起こる問題や摩擦を解決し、人間関係を修復するため使われる戦略である。謝りが断りを表明するときによく用いられる肝心な表現の一つになっているのもこのような機能によるものである。その形式は「すみません」のように1語で表現される場合もあれば、「すみません、都合が悪くて」のように他の表現とともに用いられる場合もある。本節では、謝りが含まれている断り場面のみをとりあげ、謝る際に用いられるアイ・コンタクトを見てみることにする。まず、日本人のアイ・コンタクトの例を示す。

<例6>

AとBは知り合い

A-1:(せき払い、視線そらしたまま)よかったら食事にでも行かないか#今度は焼肉です。(省略)

B-2:(視線あげながら) それ|に|

A-3: |あ|分かる 他に好きな子がいるんだ。

B-4:(お辞儀しながら) ごめんなさい。

A-5:それでも作家なんだから 大体の展開は分かる#今も断られるの分かって誘ったんだ#8割ちょっとだったんだけど+...

B-6:(お辞儀しながら) ごめんなさい。

A-7:悪かったね。

<ラブ・ストーリー>

例6はAがBと一緒に食事したいと申し出ている場面である。それに対して、Bはそれを断っている。話を続けるのに無理がある場合、相手の目を避ける傾向があるということを第2章の「勧誘と依頼を断るときのアイ・コンタクト」

で見た。また相手を困らせる表現を言わざるを得ないときには、B-4とB-6のように、お辞儀をしながら謝る。このお辞儀について井上(1982:108)は「わたしたちのあいさつ行動はお辞儀である。このお辞儀という振る舞いの形式に忠実であれば、わたしたちは、相手の視線をお互いに自然に避けあうことができるのである」と述べている。このお辞儀の形式はあいさつを交わす場面だけではなく、謝る場面でもよく使われるが、これを上手に使いこなせば相手の目を避ける手段になるようである。

次に韓国人のアイ・コンタクトを見てみる。

<例7>

A:シンヨン(グッキの友達) B:シンヨンのお母さん C:グッキ

D:シンヨンのお父さん E:グッキの知り合い

A-1:아우—야— 가진 어딜 간다고 하는 거야+얼른 밥먹고 우리 집 가자.

B-2:그러, 이대로 헤어져야 되겠냐-

C-3:제가 나중에 찾아뵙게요. #오늘은 제가 꼭 해야할 일이 있어서 그래요. (A에게 끼고 있던 팔짱을 풀며 D를 본다) 죄송해요.

D-4:늦은 시간인데 일은 나중에 하고 오늘은 우리집에 같이 가자.

E-5:(A를 보며) 저, # (D를 보며) 국희하고 아버지 산소에 다녀오려고 그래요.

A-1:グッキ 一体どこへ行くと言うの+ご飯食べてから家に行こうよー。

B-2:そうしよう このまま別れちゃ寂しいじゃない。

C-3:時間ができたら かならず行きます。#今日はどうしてもやることがあるんです。(Aに組んでいた腕をはずしながら、Dをみる) すみません。

D-4:もう遅くなったし、それは明日にして一緒に行こう。

E-5:(Aをみながら) あおう # (Dをみながら) グッキとお父さんのお墓に行ってください。

<국희(グッキ)>

例7は日本のドラマの例6と同じく相手から食事の誘いを断る場面である。食事につき合えない理由を述べてから謝罪をしている場面は、例6と似ている。異なるのは、例6のBが視線を落としたまま「ごめんなさい」と謝っているのに対し、例7のC-3は相手の目を見たま「죄송해요(すみません)」という謝りを表明していることである。ちなみに、視線を落としてお辞儀をしながら謝るシーンは日本のドラマの場合、総発話82回のうち10回も見られたのに対し

て、韓国のドラマではまったく見られなかった⁷。生越（1995）は韓国の映画を用いて、日本人と韓国人のお辞儀の違いについて調査を行っている。そこで生越は、日本では握手の習慣は視線と接触を嫌う問題がからまることもあって一般化していないが、韓国ではお辞儀と結びついて盛んであることを明らかにしている。

5. 断り表現の文末で用いられるアイ・コンタクト

対話時には5つの目の機能があるとされている。(1)話す・聞くの交替時期を調整する、(2)相手の反応をモニターする、(3)意思を表示する、(4)感情を表現する、(5)当該対人間関係の性質を伝達する、である（ブァーガス（1987））。

普通、話し手は最初に聞き手と視線を合わせてから対話を開始し、話を始めたら聞き手から目をそらす。話の途中で話し手が聞き手を見るのは聞き手が自分の話をよく聞いているかどうか、あるいは理解しているかどうかを確認するときである。また、時々合わせた視線を相手の目に止めるのは自分の話を終わらせたい場合であり、それは相手に発話権を渡したいという合図である。このタイミングが合わないとオーバーラップの原因になったり、話し手がまた何かを言い出さざるを得なくなったりする。このように視線が会話の順番を調整するということは、Kendon（1967）、Duncan&Fiske（1977）によって明らかにされている。

それでは、断り表現の文末にも相手を見るという視線ONは守られているのだろうか。ここでは上記の目の5つの機能の中で(1)の「話す・聞くの交替時期を調整する」という機能に着目し、断り場面と関連づけて探ってみることにする。

<例8>

A：作家 B：作家の担当者

A：今度書いたら君に出す。

B：いいです。# 約束はいいです。 # 今のその話だけでうれしいです。

A：（沈黙）

<ラブ・ストーリー>

例8はAの提案（本稿では勧誘とみなす）に対して、Bは「いいです」とはっきり断っている。このように言語コミュニケーションは明確であるが、それに伴うNVCは少し不安定である。また、自分の話を終え、相手に発話のバトンを渡すときには相手の目を見ていない。BはAを見るべきの所で見ていないの

である。日本人は例8だけではなく全体的にそういう傾向がある。調査分析の結果、視線OFFで終わるのは総82回のうち53回(64.4%)であり、視線ONで終わる場合の29回(35.4%)をかなり上回っている。

古本(1993)は日本語話者を対象に発話に随伴する視線行動の研究を行なった。話し手に事前に漫画を見せ、その内容を聞き手に語らせるという方法を取り、発話しているときの視線行動が「伝達のモダリティ」や「聞き手めあての働きかけ」と関連していることを明らかにした。まず、「聞き手めあての働きかけ」が強いと判断される演述文と問いかけ文の文末では視線ON率が高く、それが弱いと判断される疑い文の文末では視線ON率が低いということが明らかになった。また、発話の文末における視線ONと視線OFFはその発話の種類によって決まってくる場合や、視線行動によってその発話の機能を認識できる場合があるという。しかし、断りを表明する場合と普通の気楽な会話とどれぐらいの差があるか、あるいは同じ傾向が見られるかは明確にされていない。さらにその相違点を観察するためには異なる場面を設定し、資料を増やして観察する必要がある。

次に、韓国の場合を見てみる。

<例9>

A: デパートの社長 B: デパートの職人

A-1: 상품고매부 맡아주십시오.

B-2: (고기자르면서) 얘기를 듣고 오셨는 지 모르겠지만요, 전 여기서 (고기 자르는 것을 멈추고) **고기자르는 일이 가장 좋답니다.**

A-3: 백화점 이제 겨우 시작입니다. 맡아주십시오.

B-4: (고기자르면서) 어떤 쇠고기가 맛있는 줄 아십니까+ 사장님 + (고기 자르는 것을 멈추고) **전여기서 일하는 것이 가장 편합니다# 그냥 내버려 두십시오.**

A-1: 商品購買部を担当してください。お願いします。

B-2: (肉をきりながら) **どこでどんな話を聞いてらっしゃったか知りませんが** (肉を切るのをやめて) **私はここで肉を切る仕事が一番好きなんです。**

A-3: うちのデパートは今が大事なんです。担当してください。

B-4: (肉を切りながら) **どんな牛肉がおいしいのかご存知ですか+社長+** (肉を切るのをやめて) **私はここで働くのが一番落ち着きます#ほっといてください。**

<줄리엣의 남자 (ジュリエットの男)>

韓国の場合、視線OFFで終わるのは総135回のうち18回(13.3%)に過ぎず、ほとんど視線ON117回(86.6%)で終わる。Aの依頼に対してBは他の行動をとりながら応じている。にもかかわらず話を終えるときには相手をちゃんと見ることによって自分の話はまだ終わりだという合図を送るのである。韓国人の断り表現の場合、話す・聞くの交替時期を調整するというアイ・コンタクトの機能が十分に発揮されている。断り表現の文末で相手をよく見ない日本人とよく見る韓国人の差は、日本人と韓国人が各々重んじている表現の違いから来たのではないかと思われる。つまり、日本人は明確に拒絶を表す表現をさける曖昧型を、韓国人は曖昧さをさけて明瞭に伝えようとする率直型を好む(任(1999))。日本の場合の曖昧型の断り表現に、理由節のみを述べて帰属節を省略するというような文が見られる。たとえば例1において、「いやいや、私ちょっと今日約束があるんで」とだけ言って「だめです」のような表現を省いている。例3の「ウチの広場もね、そう広いわけじゃないから」も理由節であり、帰属節は省かれている。例8を除いて日本人の会話ではこのような現象がよく見られる。帰属節まで言わないでお茶を濁すこのパターンはアイ・コンタクトにも影響を与え、視線もOFFになる傾向があるのではないかと思われる。しかし、韓国人の会話では帰属節が省略されるようなパターンはほとんど見られない。例2の「아니예요, 밑에 친구가 기다리고 있어요 (いいえ、下で友達が待っているんです)」や例7の「제가 나중에 찾아볼게요. 오늘은 제가 꼭 해야 할 일이 있어서 그래요 (時間ができたらかならず行きます。今日はどうしてもやることあるんです)」などすべての例文で省略されている部分は見られない。大部分の例は最後までちゃんと文を終えているし、視線ONで終わっている。これは肝心な部分をちゃんと伝えようとする韓国人の意識とアイ・コンタクトが深くからまっていることの現れであると思われる。

6. おわりに

考察の結果、次のことが明らかになった。日本人は断るとき、アイ・コンタクトを気にするが、韓国人はあまり気にせず、相手を見て意見を表明する頻度が高い。話がより深刻化すればするほど相手の顔を見ることをできるだけ避けようとする傾向があるという仮説は、日本人には当てはまるものの韓国人には必ずしも当てはまらない。日本人と韓国人が持っているアイ・コンタクトに対する考え方を知らずにコミュニケーションを行ったら、日本人は韓国人の視線が気になるだろうし、韓国人は日本人が視線をそらすのが気になるかもしれな

い。しかし、このような特徴を納得した上でコミュニケーションを行ったらコミュニケーション・ギャップは生じにくい。日本にも韓国にも両文化でよしとされる視線の保ち方は存在する。断りは人間関係と深く関係があるため、日本人同士でも韓国人同士でも、また日本人と韓国人の接触場面でも、NVCのストラテジーのあやまちは誤解を招きやすいので注意が必要ではないだろうか。

注

- 1 「勧誘」と「依頼」の区別は森山（1990）にしたがいがい、相手の申し出について「結構です」という答えが適切な場合は「勧誘」と、不自然な場合は「依頼」とみなす。
- 2 ハンガリーの批評家であるベラ・バラージュ（1959）は比較言語学が存在するように、映画を通して身振りや表情を研究しなければならないと主張している。
- 3 会話を交わす人同士の距離が遠ければ遠いほど凝視率は高くなる。
- 4 生駒・志村（1993）は断り方に英語から日本語へのプラグマティック・トランスファーが見られるかどうかを調べた。食べ物を断る際に日本人は「お腹がいっぱいです」を多用する反面、アメリカ人日本語学習者は「けっこうです」を多用することが分かった。生駒らはこれをアメリカ人日本語学者の中で起きた有害なプラグマティック・トランスファーと判断している。このことからうかがえるのはあまり負担のない申し出や相手の利益とあまり関係ない類を断る場合はストレートになりやすいということである。しかし、これを有害なプラグマティック・トランスファーと見ているのは、このような言い方が時には失礼に当たるからではないだろうか。
- 5 「アイ・コンタクト」は広い範囲で考えると「表情」の一部であり、二つは密接な関連があるということが明らかになった（任（2001））。本稿では紙幅の都合により表情に関する記述は省略する。
- 6 森山（1990）は相手の「都合が悪い」という断りが後で嘘と分かった場合の評価について調べた。その結果、上下関係よりは親疎関係の方が問題になると言っている。相手が親しい友達の場合は6割以上が気分を害するが親しくない友達の場合はそれほどではなく3割未で大幅に減っている。
- 7 お辞儀には「感謝」や「謝罪」が伴う場合が多い。韓国は「感謝」を表現する際は視線を落したままお辞儀するケースが多く、「謝罪」を表現する際は相手をみたまま腰だけ低くしてお辞儀するか、他のNVCを用いて表現す

る場合が多い。

引用文献

- 生駒知子・志村明彦（1993）「英語から日本語へのプラグマティック・トランス
ファー:断りという発話行為について」『日本語教育』79号pp.41-42 .
- 井上忠司（1982）『まなごしの人間関係』講談社現代新書.
- 任炫樹（1999）「日本語と韓国語の断り表現」『ことばの科学』第12号 名古屋
大学言語文化部言語文化研究会 pp.201-215 .
- 任炫樹（2001）「日韓の非言語コミュニケーションについて—断りを表明する場
合を中心に—」『第8回研究大会予稿集』社会言語科学会 pp.27-
32 .
- 任栄哲・李先敏（1995）「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日
本語教育』第5号国際交流基金日本語国際センター pp.239-251 .
- 生越まり子（1995）「しぐさの日朝対照研究—お辞儀について—」『日本語学』
3月号 明治書院 pp.59-69 .
- 金慶燕（1999）「言語使用に関する対照社会言語学的研究—日本人・韓国人・韓
国人日本語学習者の否定表明を中心に」大阪大学大学院言語文化研
究科博士後期課程博士学位申請論文.
- 佐藤忠男（1977）「視線と呼びかけ」『展望』8月号 筑摩書房 pp.152-168 .
- 古本裕子（1993）「発話に随伴する視線行動の研究—日本語話者の場合—」名古
屋大学文学研究科修士論文.
- 森山卓郎（1990）「断りの方略」『言語』8月号 大修館書店 pp.59-66 .
- 渡辺吉鎔（1985）「会話分析にみる日韓コミュニケーション・ギャップ」『言語・
文化コミュニケーション』12. NO.1 慶応義塾大学紀要 pp.132-
175 .
- バラージュ,ベラ（佐々木基一訳）（1959）『映画の理論』講談社.
- ブァーガス,マジヨリー・F.（石丸正訳）（1987）『非言語コミュニケーション』
新潮選書.
- ブロズナハン,リージャー（岡田妙・斎藤紀代子訳）（1988）『しぐさの比較文化
ジャスチャーの日英比較』大修館書店.
- 김진웅（金鎮雄）（1989）「한국인의 비언어적 커뮤니케이션행위에 관한
연구（韓国人の非言語コミュニケーション行為について）」韓国外国
語大学校大学院新聞放送学科修士論文.

- Birdwhistell,R.L. (1970) *Kinesics and context-Essays on body-motion*.University of Pennsylvania Press.
- Duncan,S.D.J.&D.W. Fiske. (1977) *Face-to-face interaction:Research, methods,and theory*. Hillsdale, N.J. :Lawrence Erlbaum.
- Kendon,A.(1967) “Some functions of gaze-direction in social interaction”, *American Psychologist*, 26. pp.22-63.

